

幽
霊
の
日

水鳥川岳良

【登場人物】

田元了 (27) 小学校教諭

日置寧音 (31) 龍之介の母

日置龍之介 (11) 小学5年生

田元重樹 (79) 田元の祖父

田元一葉 (49) 田元の母

岡村将太 (11) 小学5年生

古閑太志 (11) 小学5年生

矢野武 (36) 寧音の元彼

佐々木喜一 (52) 元編集者

先輩教諭

男性

お局社員

将太の母

児童

○小学校・教室の前の廊下（夕）

窓ガラスが割れていて、隠すように張られた新聞紙が風で小刻みに揺れる。教室の扉の上に5年2組と書かれた札。

○同・教室の中（夕）

廊下の方から、新聞紙がはためく音。教室の前方、教員用の席で田元了(27)がプリントの丸付けをしている。

教室の一番後ろ、窓際の席に日置龍之介(二)が座り、窓の外を眺めている。

龍之介「先生」

田元が手を止めて顔を上げる。

田元の鼻の横にはほくろが二つある。

龍之介「幽霊っていると思う？」

と、窓の外を眺めたまま。

田元「それは、窓を割ったことと関係ありませんか？」

龍之介「（答えず）……」

パタパタとスリッパで走る音がする。

扉が開き、日置寧音（31）が入ってくる。

田元「（立ち上がった）こんにち（は）」

寧音「（遮って）大丈夫？ケガしてない？ど

こか痛いところは？」

と、龍之介に駆け寄り、べたべた触る。

龍之介「なにもないって」

田元、それを呆れ気味に眺めている。

寧音が振り返って田元を睨み、

寧音「監督不行き届きですよ。何かあったらどう責任取るんですか」

田元「日置さん。教師にすべて任されては困ります」

寧音「はあ？開き直るんですか」

田元「子どもは周りの大人みんなで育てるものだと思っています。それぞれの大人が、それぞれできることを教える。例えば、わざと窓ガラスを割ってはいけない。そういったことは、ぜひ保護者の方から教えてあげてください」

寧音「わざと？」

と、龍之介を見る。

田元「そういうわけで、こちらをお願いします」

と、請求書を寧音に渡す。寧音が受け取って見ると、「修理代9000円」。

寧音「学校が払ってくれないんですか」

田元「事故であれば払います。しかし今回は龍之介さんが箒で、わざと、割りましたので」

寧音が龍之介と目線を合わせ、

寧音「ほんとにわざとなの？何で？」

龍之介「割りたかったから」

寧音「なら、良し。よくやった」

田元が眉をひそめる。

田元「下に誰かいた場合を考えてください。

どうするんですか」

寧音「いたんですか？」

田元「いませんでしたけど」

寧音「ならいいじゃないですか」

田元「(批難するように) 日置さん」

寧音がため息をついて、

寧音「(吐き捨てるように) めんどくさい男」

田元「はい？」

寧音「払います、払えばいいんでしょ」

と、財布からお金を出そうとするが、
足りないことに気づく。

寧音「月末でいいですよ」

と、伺うように田元を見る。

○同・職員室(夜)

先輩教諭が背もたれにもたれながら、

先輩教諭「叱らない教育ってやつ？」

田元が真摯に話を聞いている。

先輩教諭「そういう教育方針なんだって、日置さん。やりたいことはやらせる。それが子どもの個性を守るって」

田元「理想ですね」

先輩教諭「その結果があれでしょ。低学年のころから何かと問題起こしてるんだよ」

田元「そうなんですか」

先輩教諭「赴任早々大変だね。手伝えること
あつたら何でも言つてね」

田元「自分で何とかしみます」

先輩教諭、面食らつて2、3回瞬きを
して。

先輩教諭「そう？ま、いつでも相談して」

田元「ありがとうございます。失礼します」
と、席を立つ。

○田元家・外観（夜）

○同・居間と和室（夜）

田元が帰ってくる。

居間に誰もいないのを見て、

田元「じいちゃん、ただいまー」

と、2階に声を掛ける。そのまま居間
とつながつた和室に入る。

和室の仏壇のおりんを鳴らし、

田元「ばあちゃん、ただいま」

と、祖母の遺影に声を掛ける。

仏壇には遺影のほかにもいくつか写真が供えられている。

その中に、縄文杉の前でピースしている中学生くらいの男の子の写真がある。

男の子の鼻の横に二つのほくろがあり、

田元の中学生の頃の写真だとわかる。

* * *

フラッシュ。

龍之介「幽霊っていると思う？」

* * *

田元「幽霊、ね」

と、祖母の遺影を見る。

遺影の祖母は、優しく微笑んでいる。

○日置家・居間（夜）

アパートの一室。

龍之介が漫画雑誌を読みながらパンを食べている。

大きな本棚があり、漫画がぎっしり詰

まっている。古い漫画が多く、新しいもの少ない。どれも読み古されている。近くの床に漫画雑誌が積まれている。

寧音が洗濯物を抱えてやってきて、

寧音「今週号イマイチだったね」

龍之介「先週号ね」

寧音「我が家では今週号」

と、ベランダに行こうとする。

龍之介「あ、待って」

と、冷蔵庫に貼られたプリントを外し、

龍之介「これ明日まで」

寧音「え？」

と、洗濯物を下ろし、プリントを受け取る。個人懇談の日時希望調査票だ。

龍之介「遅れると先生うるさいよ」

寧音「頭堅そうだもんな。(誇張気味に田元の

真似をして) 日置さん。教師にすべて任さ

れては困ります」

龍之介「(笑う)」

寧音「モテないだろうなあ」

龍之介「母さんの的にナシ？」

寧音「ナシ中のナシ。やっぱりお母さんには
パパしかない」

と、プリントに希望日時を記入する。

龍之介「パパよりイイ男がいたら再婚しても
いいんでしょ？」

寧音「そう。パパより強くてかっこよくて、
お母さんを守ってくれる器の大きなイイ男
がいたら再婚してもいいよって約束。つま
り再婚するなってこと。（プリントを指し）
明日忘れずに持ってってね」

と、洗濯物を持ちベランダに出ていく。

○小学校・教室

授業中。

田元が板書をしている。龍之介を見る
と、真剣に授業を聞いている。

田元「栗を持ってきていたのはゴンだったと」
と、板書を続ける。

教室の後方から2〜3人のクスクスと

いう笑い声と、「カチカチ」という音が聞こえる。

田元が注意しようと振り返り、

田元「何をして」

龍之介「せんせー！」

龍之介が立っている。手には黄緑色のステープラー。

龍之介の隣の席には将太がいる。

龍之介「うんこ行きたい」

田元「どうぞ」

龍之介がステープラーを机に置き、教室を出ていく。

田元「このときの兵十の気持ちを考えて、書いてみましょう」

田元が児童たちのノートを見ながら龍之介の席まで歩いていく。

龍之介の斜め前、分厚い眼鏡をかけた古閑太志（二）の席の周りにステープラーの針がたくさん落ちている。

田元が太志を見る。

田元「古閑さんのですか？」

太志が首を振る。

その髪に2と3、針がついている。

田元が周囲を見ると、児童たちは皆、さつと顔を伏せる。

田元、龍之介の席のステープラーを手に取る。

○コールセンター・電話対応オフィス（夕）

制服を着た従業員が、電話対応を行っている。その中に寧々がいる。

寧音「はい、ありがとうございます」

と、電話を切る。時計を見ると、17時。ヘッドセットを外し、隣の席に、

寧音「お疲れさまでした」

と、声をかけて立ち上がる。

声をかけられた隣の席の男性が、

男性「日置さん、これ。俺もう読んだから」と、漫画雑誌を差し出す。

寧音「いつもすみません」

と、両手で受け取る。

お局社員がきて、

お局社員「日置さん、今日ちよつとだけ残業できる？」

寧音「あ、今日でしたら」

と、言いかけると、寧々のスマホが着信する。

寧音「すみません。(スマホを確認し)息子の学校から呼び出しが」

お局社員、不機嫌そうな顔。

寧音「すみません」

と、頭を下げる。

○小学校・職員室(夕)

額にガーゼを貼った岡村将太(二)が俯いている。

将太の母の声「何でうちの子がこんな目に合
わなきやいけないのかを聞いてるんです」

衝立で区切られた応接スペースで、将太、将太の母、田元、龍之介が話し合

っている。

田元「岡村さん、落ち着いてください」

将太の母「親は何でまだ来ないんですか」

田元「まもなくいらっしやるはずなので」

寧音が息を切らしてやってくる。

シヨルダーバッグと、漫画雑誌を抜き

身で持っている。

寧音「すみません、遅くなりました」

と、龍之介のそばに立つ。

将太の母が漫画に気づき顔をしかめる。

寧音「何があったんでしょうか」

将太の母「あなたの息子が、うちの子に突然

暴力をふるったんです」

寧音「え？」

と、田元を見る。

田元「そばにいた児童たちはそう言っていま

す」

将太の母「どういう様子してるんですか」

寧音「様子」

田元「ただ、本人たちが話さないので、原因

はわからないんです」

寧音が龍之介の目を見る。

龍之介「（目を逸らして）殴りたかったから

殴っただけ」

将太の母「（絶句して）……」

寧音「（一瞬戸惑ってから）後悔してる？」

龍之介「してない」

将太の母「ちよつと」

寧音「なら、よし」

将太の母「ふざけないで！」

寧音が深々と頭を下げて、

寧音「母親として、龍之介が息子さんにけがをさせてしまったこと謝ります」

将太の母「はあ？」

寧音「治療費をお支払いさせていただきます」

と、財布を取り出す。

将太の母「お金払えばいいと思ってるの？そういう問題じゃないでしょ。ちゃんと叱りなさいよ。あんた親でしょ？」

寧音「はい」

将太の母「いや、これだから母子家庭は」

田元の眉がピクリと動く。

将太の母「かわいそうなのは子どもなんだからね。碌な大人になれないわよ。責任取れないなら産むな！」

寧音、俯いたまま、耐えるような表情。

田元「母子家庭は今関係ないと思いますが」

寧音「(え?と)……」

将太の母「はい？」

田元「親がしようといまいと、子どもは育ちます。大事なのは周りにどんな大人がいるかじゃないですか。生きる助けになる何かを与えられる大人がいれば、子どもはちゃんと成長できます。少なくとも私は、そんな大人たちに育ててもらったし、そんな大人たちの一人になりたいと思っています」

将太の母「(気まずそうに)……」

寧音が田元の顔をじつと見る。

田元「ひとまず今日はおかえりになってはどうでしょう。自宅の方が正直に話せるか

もしれませんし」

将太の母「……わかりました。行くわよ」

と、将太を促し、立ち去る。

○同・廊下（夕）

下駄箱に向かって龍之介が歩いている。

少し遅れて、田元と寧音が歩きながら話している。

寧音「ありがとうございます」

田元「（驚いて）……」

寧音「私だってお礼くらい言います」

田元「いえ、すみません。日置さんのためと
いうか、自分のためだったので」

寧音「はい？」

田元「私、両親いなくて」

寧音「（え、と）……」

田元「親がないからどうのつて話、自分が
言われているみたいで。それだけです」

寧音「ごめんなさい」

田元「いえ。ですから日置さんのためではな

かったですし、実際日置さんは言動を見直した方がいいと思います」

寧音「教育方針なんで」

田元「そういうことじゃなくて。例えばあの場にそういうのは持ってこない方が良いでしょう」

と、目線で漫画雑誌を示す。

寧音「あ、これは、はい、すみません」

寧音が隣を歩く田元の横顔を見る。

寧音「先生って、思ったよりいい人ですね」

田元「印象が悪かったことの裏返しなので、

それもあまり言わない方がいいですね」

寧音「(笑って)褒めてるのに」

田元「褒めてないんですよ」

寧音、少し楽しくなって、

寧音「先生、好きな漫画とかありますか？私結

構読んで」

田元「冷たく拒絶するように)ありません。

読んだこともないです」

寧音「(思わず足を止めて)あ、そっすか」

田元は歩き続け、寧音が取り残される。

○田元家・居間（夜）

テレビのニュースで相撲の試合が流れている。

田元重樹（79）がそれを見ながら食事している。向かいの席には田元。

田元「二人して黙ってるんだ」

重樹は箸とお椀を持っているが、食べずにテレビを見ている。

田元「相手が悪い、とも言わない」

重樹「……」

田元「じいちゃん？」

重樹「ああ、負けた」

田元「相撲？」

重樹「相手をよく見んといかん。よく見んと」

と、味噌汁を飲む。

田元「……」

田元も味噌汁を飲む。

○同・男子トイレ

デッキブラシやラバーカップなど、掃除道具が散乱し、水浸しになっている。長靴とゴム手袋をはめた児童3人が、バツが悪そうに立っている。

3人のうち2人は太志と将太だ。

全員濡れているが、太志が一番ひどく、ズボンを中心にずぶ濡れ。

少し距離を取り、龍之介が不機嫌そうに立っている。

4人の様子を見ている田元。

田元「説明できますか？」

児童たちは目を合わせようとしない。

龍之介「俺がやった」

田元「……」

田元、濡れている3人の児童を見て、

田元「とりあえず、皆さん、着替えましょうか。体操服ありますか？古閑さんは、下着も替えた方がよさそうですね。保健室に行きましょう」

と、3人を連れてトイレを出る。

田元「龍之介に）日置さんは教室で待っていてください」

太志が龍之介を振り返りながら去る。

龍之介、太志の姿を目で追う。

○同・保健室の前（夕）

田元が養護教諭と話している。

田元「おもらし？」

養護教諭がうなづく。

田元「わかりました。ありがとうございます。」
と、頭を下げる。

養護教諭も会釈して保健室に戻る。

田元、少し思案して、歩き出す。

○同・教室（夕）

龍之介が自分の席で漫画を読んでいる。
扉が開き、田元が入ってくる。

龍之介が慌てて漫画を隠す。

田元「さて」

と、龍之介の前の席の向きを変え、龍

之介と向かい合って座る。

田元「二つ聞きたいことがあります。でもその前に、謝らないといけません」

龍之介「(不思議に思い)……………」

田元「古閑さんがいじめられていることに気が付かず、すみませんでした」

龍之介「いじめってほどじゃ」

田元「やはりいじめられてるんですね」

龍之介「……………」

田元「どうして、隠すのですか。これが一つの質問です」

龍之介「……………」

田元、黄緑色のステープラーを机に置く。
く。

田元「あなたのものではないですね」

と、ステープラーをひっくり返すと「岡村将太」と書かれている。

田元「いじめを止めようとして、それなのにあなたはいじめを隠している」

龍之介「……………」

田元「岡村さんに暴力をふるったのは、古閑さんを守るためでしょうか」

龍之介「……」

田元「水をかけたのは誤魔化すためですね。」

古閑さんが、我慢できなかったことを」

龍之介「……」

田元「二つ目です。そんなに大人は信用できませんか？」

龍之介「……」

田元「……」

龍之介「忙しそうだから」

田元「……」

龍之介「古閑ちゃんが、親にばれたくないって。忙しそうだから心配とか面倒とか、掛けたくないって。気持ち、よくわかるから」

田元「それで、窓も？」

龍之介「みんな、岡村は怖くても、俺が何かしたってなったら先生を呼びに行ける」

田元「……ありがとうございます。ここからは私に任せてください」

龍之介「(不安そうに)……」

田元「こう見えて、大人の中でも忙しくない方なので。そういう大人でありたいので」

龍之介「オオゴトにはしないで。古閑ちゃん
が困るから」

田元「わかりました」

と、頷く。

田元「あ、それともう一つ。幽霊、いますよ」

龍之介「(一瞬驚き、笑って)いいよそういう
の」

田元「会ったことがあるんです。中学生の時、
家出して屋久島に行ったんですが」

龍之介「先生が家出？」

田元「はい。そこで、屋久島で祖母の幽霊に
会いました」

と、微笑む。

龍之介、驚いて、……。

○日置家・居間(夜)

龍之介が興奮気味に寧音に話している。

寧音は家事をしながら聞いている。

龍之介「あと少して縄文杉ってところで、その人先生を庇って怪我しちやっただ。それで、先生も一緒に諦めようとしたら」

寧音「うん」

龍之介「『中途半端はだめ。縄文杉の写真撮って、仏壇に供えて』って。おばあちゃん
が死んだこと話してないのに」

寧音「へー」

龍之介「やっぱ幽霊はいるんだ」

寧音「なんか」

龍之介「何？」

寧音「なんだろう」

と、何かを思い出そうとする。

お風呂が沸いた合図が鳴る。

寧音「あ、お風呂沸いたよ。入っちゃって」

と、龍之介をお風呂場へ促す。

龍之介「何何、気になる」

寧音「いいからいいから」

と、龍之介をお風呂場に追いやる。

寧音、龍之介を見送ってから、引き続き何かを思案する。

寧音「あっ」

漫画の棚のカーテンを開けて、背表紙を目で追っていく。目当ての本が見つからず、眉間にこぶしを当てて考える。

寧音「もしかして」

と、箆笥の下の引き出しを開けようとするが、止まって、風呂場を振り返る。風呂場からシャワーの音が聞こえる。

寧音、頷いて引き出しを開け、奥から同人誌の束を取り出す。

一冊ずつ確認し、

寧音「あ」

と、手を止める。「幽霊の日」というタイトルの同人誌だ。中を開いてページをめくっていく。絵の線がひどくぶれていて、上手とは言えない漫画。

ページをめくる手が止まる。

山の中、女性が男の子に向かって「中

途半端は許さない。縄文杉で写真撮って、仏壇に供えなさい」と言っているコマ。

寧音がページをめくる。

女性が左手を男の子に差し出し、「これ、あげる」と言っている。泥で汚れた「商売繁盛」のお守りだ。

○小学校・教室

チャイムが鳴っている。

教卓の上、筆箱に古くて汚れた「商売繁盛」のお守りがついている。

田元が教卓から、

田元「今日から懇談が始まるので机をきれいにして帰ってくださいね」

児童たちが「はい」「はい」など、

口々に返事をする。

席替えされていて、以前と違う雰囲気。教室の後方に2〜3名の保護者が立っている。その中に将太の母もいる。

田元「では、号令係さんお願いします」

と、教卓の目の前の席に声をかける。
その席には将太が座っている。

将太「起立」

児童たちが席を立つ。龍之介と太志は
それぞれ将太から離れた席にいる。

将太「気を付け。さようなら」

児童たちが「さようなら」と復唱する。
そのまま帰り支度をして教室を出てい
く児童たち。

将太「(廊下に)廊下走っちゃだめだ、です
よ！」

将太の母が誇らしげに将太を見ている。

○同・職員室

先輩教諭と田元が話している。

先輩教諭「自由参観、始めたんだって？」

田元「はい、ご希望の保護者の方はいつでも
授業は見られるようにと」

先輩教諭「何でまた？気、遣うでしょ」

田元「緊張感を持って授業できますし」

先輩教諭「田元先生、しっかりしてるなあ」

田元「ありがとうございます」

先輩教諭「でもたまには肩の力抜くのも大事だよ。頼ってくれてもいいし」

と、田元の肩を軽くたたく。

田元「大丈夫です。これが普通なので」

先輩教諭、心配して何か言おうとするが、言葉を飲み込む。

○コールセンター・更衣室（夕）

帰り支度をしている寧音。スマホのメールを見る。個人懇談の案内で、17時30分からと書かれている。

寧音「五時半からっ」と

着替え終わった同僚が出ていく。

同僚「お疲れさまでした」

寧音「お疲れさまでした」

寧音も出ていこうとすると、お局社員が入ってきて、

お局社員「日置さん、すぐ戻って」

寧音「え、何ですか？」

お局社員「あなたがさつき対応したお客様から電話。すごい怒ってる」

寧音「いや、でも」

と、スマホを見ると、17時6分。

お局社員「また学校から呼び出し？どうせ子どもがなんかしたんでしょ」

寧音、ムっとして、

寧音「違います。すぐ行きます」

と、部屋を出る。

○同・電話対応オフィス（夕）

ヘッドセットをつけ謝罪している寧々。

寧音「申し訳ございません。はい、私が間違っております、ご迷惑をおかけしております」

寧音が時計をちらりと見る。

時刻は17時42分。

○小学校・教室の前の廊下（夜）

割れた窓に新聞紙が貼られている。
教室から明かりが漏れている。

○同・教室（夜）

四つの机が向かい合わせにくつつけられていて、その一つに田元が座っている。

田元が時計を見ると、時刻は19時過ぎ。

パタパタとスリッパで走る音がする。

田元は席を立ち、教室の扉を開ける。

寧音が息を整えている。

寧音「（息を切らして）遅くなっちゃって」

田元「いえ、私は大丈夫ですが」

寧音「龍之介は、塾の日なので」

田元「そうですか、どうぞ」

と、寧音を教室に招き入れる。

* * *

田元と寧音が向かい合って座っている。

寧音「龍之介が、そんなこと」

田元「はい。早くお伝えすべきだったのですが」

寧音「いえ。(嬉しさを隠すように) 不器用ですね、あの子」

田元「手段に問題はありますが、私はすごいと思いました」

寧音「ありがとうございます」

田元「日置さんもです」

寧音「(意味がわからず) ……?」

田元「信じ続けるのも簡単なことではないので。叱りたいときだってあるでしょう」

寧音「……」

田元「龍之介さんは、人を思いやり、行動できる素敵な人ですね」

寧音、こみ上げてくるものがあり、

寧音「あ、ちよつと、今それは」

と、涙をこらえるように天井を見る。

寧音「違うんです。ちよつと、疲れてて」

田元「はい」

寧音、天井を見ながら、

寧音「そんないいもんじゃないんです、私。

怖がってるだけなんです。そりや叱らなきゃって思うことはいっぱいあるけど、叱るのが怖いだけなんです」

田元「子どもに嫌われるのがですか？」

寧音「(首を振り) 子どもを否定する親になつてしまうのが」

田元「……」

寧音「すみません」

田元「大丈夫ですよ」

寧音「大丈夫じゃないですよこんな」

田元「そうやって、怖いと思えるのなら、日置さんは大丈夫です。きっとそうはなりません。なつてません」

寧音「……先生、そんなことも言うんですね」

田元「どういう意味ですか」

寧音「だって、もつと、ドライというか。あ、

私また失礼なこと言ってます？」

田元「はい」

寧音「(可笑しくなつて) すみません、ふふ」

田元「いいですけど。私も日置さんのこと思
ったよりもいい人だと思いましたから」

寧音「印象悪かったことの裏返しですか？」

田元「どうでしょう」

寧音「褒めてますか？」

田元「褒めてます」

二人とも、こらえ切れず、少し笑う。

○同・廊下（夜）

田元と寧音が歩いている。

寧音「ガラス代、本当にいいんですか」

田元「はい。学校で払います」

寧音「私が払うまであのままなのかと」

田元「業者が遅れているだけです」

寧音のスマホが鳴る。

寧音、鞆からスマホを取り出そうとし

て、「幽霊の日」が入っているのが目

に入る。

田元「どうしました？」

寧音「あ、いえ。（スマホを確認して）塾も

終わったみたいです」

田元「では急がないといけませんね」

寧音「はい、ちよつと待つとくように連絡します。(スマホを操作しつつ) そういえば先生、漫画読んだことないって嘘ですよね」

田元「本当ですよ、嫌いなんです」

寧音「(スマホから顔を上げて) いやいや、龍之介に話してくれた屋久島の幽霊の話、漫画でしょ?これ」

と、鞆から「幽霊の日」を取り出して差し出す。

田元、受け取らず、じつと本を見る。

寧音「即売会で買ったやつなんだけど、これ知ってるって相当マニアックですよ」

田元、恐る恐る本を受け取り、開く。

寧音「絵はちよつとあれなんですけど、なんか気になって買ったんですよ」

田元「こんなに絵が下手でも漫画家になれるんですか?」

寧音「無理だと思います。あくまでこれは素

人の作品だし、下手な方ですね」

田元、本を握る手に力がこもり、本がぐしゃりと歪む。

寧音、驚いてその様子を見る。

田元、ハツとして、

田元「すみません！」

と、本を閉じ、歪みを伸ばそうとする。

寧音「(戸惑いつつ) 大丈夫ですよ」

田元「すみません」

と、勢い余って表紙を破いてしまう。

寧音「あ」

田元「すみません」

と、頭を下げる。

○塾の前(夜)

人通りの多い道。塾の入り口付近で、

龍之介がスマホを操作している。

龍之介、視線を感じ、きよろきよると

あたりを見回す。

寧音がやってきて、

寧音「龍？」

龍之介が振り返る。

寧音「どうした？」

龍之介「んー、たぶん幽霊」

と、歩き出す。

寧音「なにそれ」

と、龍之介と並んで歩く。

雑踏の中、二人の後姿を見つめている

男がいる。矢野武（36）だ。

○田本家・田元の部屋（夜）

田元が「幽霊の日」の破れた表紙をテープで修理している。

テープを貼り終え、少し迷ってから中を開く。パラパラとページをめくり、女性が男の子にお守りを渡しているコマを見つめる。机の上の筆箱を見ると、お守りがついている。

田元が立ち上がる。

○同・廊下く一葉の部屋（夜）

部屋から田元が出てくる。

廊下の突き当りの扉を見つめ、近づく。

田元が扉を開けると、部屋の中が見える。

カーテンが閉まっていて暗く、埃っぽい。廊下から差し込む明かりに照らされて、使い古された机と、その上に傾斜台見える。傾斜台の周りには、ペン、インクなどが整理して並べられている。

田元が扉を閉じて振り返ると、重樹が廊下の先からこちらを見ている。

田元、それに気づいて驚く。

田元「あの人の部屋、たまには換気したほうがいいんじゃない？カビ生えるよ」

重樹「ああ、そうかもな」

田元が自室に戻る。

重樹が田元の部屋の扉を見て、突き当りの扉を見つめる。

○小学校・外観

雨が降っている。

児童たちが傘を差して下校している。

○同・廊下

割れた窓に張られた新聞紙が濡れ、破れている。

○日置家・外観（夕）

寧音が傘を差して帰ってくる。

アパートの前で傘を差して立っている

田元の姿に気づく。

寧音「先生？どうしたんですか？」

田元「こないだはすみませんでした」

と、鞆から「幽霊の日」を取り出そう

として、雨に濡れそうだと気づく。

寧音「あ、とりあえず中へ」

田元「いえ、それは」

寧音「濡れてるじゃないすか」

田元「はい、ですから」

寧音「いや、だから」

二人、顔を見合わせる。

○喫茶店（夕）

田元と寧音が向かい合って座っている。

机の上に「幽霊の日」が置かれている。

寧音「お母さん？」

田元「だと思えます」

寧音「（理解できず）……」

田元「では」

と、席を立とうとする。

寧音「待って待って待って」

と、引き留める。

寧音「（本を指し）これ、実話なんですか？」

田元「中学の時、祖母が亡くなって。お葬式の日、家出して屋久島に行ったのは事実です。そこで若いころの祖母にそっくりな人に助けられたのも事実です。祖母の幽霊だと思っていました」

寧音「失踪したお母さんだったと」

田元「こんな本があるということとはそうだと
思います」

寧音「そんなことあります？」

田元「私が一番驚いています」

寧音「会いに行きます？」

田元「はい？」

寧音が「幽霊の日」の最後のページを
開いて、

寧音「連絡先載ってるんですよ」

田元「いやいいですよ」

寧音「何ですか」

田元「覚えてないんで、母の事」

寧音「(問うように)……」

田元「物心つく頃にはもう母は家にいません
でした。覚えてるのは漫画を描いている背
中くらい。それも、漫画家を目指していた
という祖父から聞いた話で、勝手に想像し
ただけなのかもしれません」

寧音「……」

田元「あ、祖父母がよくしてくれたので何の

不自由もなかったですよ。だからほんと、何も思っていないんで、会っても仕方がない
というか」

寧音「会いに行きましょう」

田元「何でそうなるんですか」

寧音「後悔するから」

田元「ないですよ」

寧音「生きてるうちに会ったほうがいいです」

田元「親子の絆とか言う気ですか？そんなものはないですよ」

寧音「死んだら勝ち逃げされるからです」

田元「……」

寧音「子どもほったらかしてたくせに、こんな漫画書いて、美化しようとしてるじゃないですか。母親としての義務を少しは果たしたかのように思い込んでるじゃないですか。一言文句言ってやらないと、そう思い込んだまま気持ちよく死んでいくんですよ。そんなの許せないじゃないですか」

田元、寧音の圧に押されて何も言えな

い。

寧音「それに」

と、「幽霊の日」を見る。

しわくちやで、破れてしまった表紙。

寧音「何にも思っていないなんて、嘘じゃないですか」

田元、寧音の横顔を見つめる。

○田元家・居間と和室（夜）

重樹がテレビを見ている。

田元が帰ってきて、

田元「ただいま」

重樹「おう」

田元が和室に入り、おりんを鳴らす。

田元「ばあちゃん、ただいま」

仏壇の写真が目に入る。縄文杉の前で撮った自分の写真だ。

田元「じいちゃん。母さんってどんな人？」

重樹、テレビを消す。

田元、重樹を振り返る。

重樹「(田元の目を見て) 中途半端」

田元「中途半端？」

重樹「自分のことをよくそう言ってた。私は中途半端な女だ。頭の出来が中途半端で、運動だって中途半端で、中途半端に絵がうまくて、中途半端に男に惚れて」

田元「中途半端に子どもを作った？」

重樹「中途半端に夢を諦められずに、寂しい思いをさせている」

田元「屋久島で俺を助けてくれたの、母さんだったんだね」

重樹、立ち上がって、戸棚を開く。

重樹「(何か探しながら) 一葉は、母さんは婆ちゃんの葬式の次の日の朝にうちに来たな。ちようどお前が屋久島に行くって電話してきたころだ」

田元「うん」

重樹「俺がお前に帰ってこいと言わなかったから、怒って、自分が迎えに行くって出たんだ。まさか本当に会えるとは思わん

かったから、お前から話を聞いて驚いた」

と、戸棚から通帳を取り出し、田元に歩み寄る。

重樹「あのころから、毎月お前宛につて」

と、通帳を差し出す。

田元「(受け取らず) 会いには来ないくせに」

重樹「中途半端なんだな」

と、通帳を机に置いて、椅子に座る。

重樹「だから」

と、何かを言いかけてやめる。

テレビをつけて、見始める。

田元、仏壇の写真を見る。

○小学校・職員室

先輩教諭が電話で話している。

先輩教諭「あ、そうですか、はい、わかりました。大丈夫ですよ。お願いします」

と、受話器を置いて、隣にいた田元に、

先輩教諭「田元先生、窓ガラスの修理、今週の土曜なら来れるって。立ち合い、お願い

できる？」

田元「あ、その。ご相談してもいいですか」

先輩教諭は意外そうに、しかし、嬉し
そうな表情になる。

○即売会会場・外

コスプレをしている人、撮影している
人、紙袋を持った人など、たくさん
人で賑わっている。

寧音の声「うわあ、懐かしい」

寧音が振り返って、

寧音「私も久しぶりに来ました」

田元が少し呆れて、

田元「一人でも大丈夫なのですが」

寧音「先生初めてでしょ？ブース見つけられ

ませんよ」

田元「いや、そんなことは」

寧音「龍、離れないで」

と、少し離れていた龍之介を呼ぶ。

龍之介「うん」

と、背後を気にしながら近づいてくる。
その様子を見つめる視線がある。

○同・場内

混雑した会場内。

田元一葉(49)が浮かない顔でブースに座っている。ブースには客がおらず、一葉は一人でイラストを描いている。その手は震え、線はぶれている。

佐々木喜一(52)がやってくる。

佐々木「先生、お疲れ様です」

と、缶コーヒーを開けてから一葉の前に置き、一葉の隣の席に座る。

一葉「先生って呼ぶな」

佐々木「先生は先生だから。売れました？」

一葉「わかってて聞いている」

佐々木「そんなことないですよ。今日はきつと売れますよ」

一葉、黙ってイラストを描き続ける。

佐々木「ほんとですって。問い合わせありま

したから」

一葉「(理解できず) ……」

佐々木「僕のメアド、最後に載せてるでしょ」

と、並べてある同人誌を一冊開く。そこに載っているアドレスを指さす。

佐々木「ほらこれ。ここに、ほかの本はどこで買えますか？って連絡があっただんで、今日のこと伝えてます」

一葉「悪趣味」

佐々木「ほんとですって」

一葉「下手だって、笑うために買うんだ」

佐々木「自信持ってくださいよ」

田元の声「あの」

一葉と佐々木が振り向くと、田元がいる。

一葉「……」

佐々木「いらっしやいませ」

田元「これ、一冊ください」

と、「幽霊の日」を指さす。

佐々木「はい、ありがとうございます」

一葉はうつむいている。

田元が佐々木にお金を渡し商品を受け取る。ちらりと一葉を見て、立ち去る。

佐々木「今の人ですかね、問い合わせ」

と、一葉を見る。

一葉はうつむいて少し震えている。

佐々木、ハツとして田元の立ち去った方を見る。

○同・会場入り口付近

田元が早足でやってくる。

寧音がそれを迎え、

寧音「全然しゃべって無くないですか？もういいんですか？」

田元「大丈夫です、これ、破いちやったので」と、さつき買った「幽霊の日」を渡す。

寧音「そうじゃなくて」

佐々木が近づいてくる。

田元「何言えばいいかわかんなくて」

寧音「だから考えとけて言ったのに」

佐々木「すみません」

田元と寧音が振り返る。

佐々木「田元田元さんですよね」

と、田元に微笑みかける。

田元「はい」

佐々木「問い合わせくれたのは貴方でしたか」

田元「え、あ、いえ」

と、寧音を見る。

寧音「私です」

佐々木は、何か言おうとして、一度やめてから、

佐々木「(田元に) 何しに来たんですか」

田元「え」

佐々木「一葉さんに会いに来たんですよ。会ってどうするつもりだったんです」

田元「わかりません」

佐々木「謝りに来たんじゃないんですか」

田元「(理解できず) ……」

佐々木「私は、謝ってほしい」

寧音「はあ？」

と、佐々木に詰め寄ろうとする。

田元がそれを制止するように、

田元「何をですか」

佐々木「一葉さんの未来を奪ったことを」

田元「(自嘲気味に笑って)生まれてこなければよかったですか」

佐々木「そんなことは。でも、あの時、先生は大事な時でした。連載も軌道に乗って。ようやくだったんです。最後のチャンスだったんです」

田元「何の話ですか」

佐々木「屋久島ですよ」

田元「何の、話ですか」

佐々木「知らないんですか」

田元「知りようがありません」

佐々木「あなたを庇ったときの怪我で、先生はペンを握れなくなっただんです」

* * *

フラッシュ。

田元「こんなに絵が下手でも漫画家になれる

「んですか？」

寧音「無理だと思えます」

* * *

佐々木「あの日から先生は、幽霊だ」

と、項垂れる。

○同・場内

一葉が、俯いて座っている。

視界に男性の足が入ってくる。

顔を上げると田元がいる。

田元「ありがとうございました」

と、頭を下げる。

一葉「……」

田元「お返しします」

と、「商売繁盛」のお守りを一葉の前に置く。

一葉、お守りをじつと見る。

田元「もう大丈夫ですから」

と、立ち去ろうとする。

一葉「(俯いたまま) 何言われたか知らない

けど、私が中途半端だっただけだから」

田元「……その中途半端さに、俺は救われた
んですね」

と、立ち去る。

一葉、顔を上げて田元の背中を見つめる。呼び止めようとするが声は出ない。

○同・外

広場になっていて、キッチンカーが並んでいる。

アスレチックもあり、何人かの子どもたちがそこで遊んでいる。

その中に龍之介もいる。

その様子を寧音と田元が見ている。

寧音「言いたいこと、言えました？」

田元「言うべきことは言えました」

寧音「言いたいこと言えてないじゃないですか」

田元「いいんです」

寧音「後悔しません？」

田元「日置さんは、何を言いたかったんです

か？」

寧音「私は、そうだな……私は、あなたに従わなくても幸せになれました。私の選択は失敗じゃありませんでした。だから心配なんておこがましいことしないでください。こんなところですかね」

田元「なるほど」

寧音「言えなかったから、そうやって生きるしかないですよ。意地張ってでも幸せだぞって」

田元「意地張ってるんですね」

寧音「張ってますよ。子ども出来て捨てられたとか普通に笑えないじゃないですか。でもいいんです。超いい男だったんだって、でも死んじゃったんだって、そういうことにしてます。龍之介にもそう言ってます」と、笑う。

田元「(龍之介を見て)それで、幽霊がいるか」
寧音「はい、パパの幽霊がいる気がするとか言い出して困ってます。死んでないのに」

田元も笑う。

寧音「(笑いを止めて) 寂しいのかな」

田元「もしかしたら。でも、大丈夫じゃないですか。私は大丈夫でした」

寧音「おばあさんたちがいたからでしょ」

田元「日置さんがいるじゃないですか」

寧音「そうですけど」

田元「私もいます」

寧音、驚いて田元を見る。

田元「大事なのは周りにどんな大人がいるかですから」

寧音「あ、ああ、そうでしたね」

と、視線を逸らす。

寧音「(空気を変えようと) あー、これ、誰かに聞いて貰えたらすつきりするんだ。もっと早く話せばよかったな。先生も、言いたかったこと、私が聞いてあげますよ」

田元「機会があれば」

寧音「いつでもどうぞ」

龍之介がやってくる。

龍之介「母さん、あれ食べたい」

と、クレープのキッチンカーを指さす。

○イートインスペース

キッチンカーの近くのイートイン用の
テーブル。田元と龍之介が話している。

龍之介「先生ありがとう」

田元「まだ解決はしてないと思いますが」

龍之介「でも岡村だいぶおとなしくなったよ」

田元「そうですね」

龍之介「それだけじゃないし」

田元「なんですか？」

龍之介「楽しそうだから」

と、キッチンカーの方を見る。田元も
つられて見る。クレープの列に並ぶ寧

音が、田元たちに手を振る。

龍之介「ちなみに、パパより強くてかつこよ
くて、母さんを守ってくれる器の大きな
い男がいたら再婚してもいいんだって」

田元「はい」

龍之介「つまり誰でもいいってこと」

田元「そうなんですか？」

龍之介「母さんを一人にしたやつなんかより、一人じゃなくした方がいい男に決まってる」

田元「なるほど」

龍之介がキッチンカーの方を見て、

龍之介「あ、幽霊だ」

田元もそちらを見ると、矢野が寧音を建物の陰に連れていくところ。

○建物の陰

寧音が矢野と口論している。

寧音「もう関わらないでって」

矢野「いいから、金貸せよ。新しい男ができたら俺は用済みか？」

と、寧音の腕をつかむ。

寧音「そっちから出てった癖に何言ってるの」

田元がやってきて、

田元「大丈夫ですか？」

矢野「おう、お前、こいつは俺の女なんだよ。」

手を出してんじゃねーよ」

寧音「違うから、やめてって」

田元「(察して) 日置さん、行きましよう」

と、寧音を連れ出そうとする。

矢野「待てよ」

龍之介が来て、

龍之介「母さん？」

寧音「龍、あっち行ってなさい」

矢野「こいつ、俺の子だよな？」

寧音「違う私の子」

矢野「じゃあ俺の子でもあるだろう」

龍之介「パパ？」

矢野「おう、パパだぞ。会えて嬉しいか？」

と、視線を下げて近づこうとする。

龍之介、勢いをつけて矢野の顔を殴る。

呆然とする一同。

龍之介「(睨みつけて) パパの幽霊がほんと

にいたら、絶対殴ってやるって思ってた」

矢野「このガキ！」

と、龍之介を殴る。田元がとっさに龍

之介を庇い、代わりに殴られる。

寧音「先生！」

田元が毅然とした態度で矢野を見据える。

田元「これ以上続けるなら、傷害罪で訴えます。次は法廷でお会いしましょうか」

矢野「(怯んで) お前、弁護士か」

田元「(冷たく見据える) ……」

矢野が舌打ちをして立ち去る。

寧音が田元に駆け寄り、

寧音「大丈夫ですか」

田元「それよりも」

と、龍之介の様子をうかがう。

寧音「龍、大丈夫？」

龍之介「余裕。一発入れてやったし」

と、誇らしげ。寧音、それを見て、

寧音「危ないことしないで！先生がいてくれたからよかったけど、もし何かあったら」

と、感極まって言葉が続かない。

龍之介「(戸惑って) ごめんなさい」

寧音が、龍之介を抱きしめる。

田元がその様子を見ている。

○電車・車内（夕）

4人掛けのボックス席。龍之介が窓にもたれて眠っている。その横に寧音。

向かいの席に田元が座っている。

寧音「ありがとうございます」

田元「ほんとにいたんですね、幽霊」

寧音「生霊というか、本人というか」

田元「もう来ないといいのですが」

寧音「大丈夫だと思います。ビビリだから

あいつ。先生を弁護士だと思ってたし」

田元「うまく勘違いしてくれました」

寧音「次は法廷でお会いしましょう」

田元「たぶん本物の弁護士は言いませんね」

田元と寧音が笑う。

田元「叱ってましたね」

寧音「え？（少し考えて）あ」

と、青ざめる。

田元「大丈夫です」

寧音が顔を上げる。

田元「大丈夫。俺たちは俺たちですから」

寧音「……先生、俺って言うんですね」

田元「今日は休みなので」

と、視線を逸らす。

寧音「（微笑んで） そうだね」

田元、龍之介が寝ているのを確認し、

田元「さすがに幽霊じゃないって気づいてたんですよ」

寧音「お母さん？」

田元「（頷き） どう接していいかわからなかったんでしょうね。幽霊ってことにしました」

寧音が鞆から新品の「幽霊の日」を取り出して、

寧音「これ」

田元「いららないです」

寧音「私も2冊はいららないです」

田元「……じゃあ、破いちゃった方を」
寧音「はい」

と、表紙の破れた「幽霊の日」を取り出して渡す。

田元が受けとり、表紙をじつと見る。

田元「言えなかったこと、聞いてくれますか？」

寧音「……はい」

田元「そうだな……まずは」

と、話し始める。

○小学校・廊下（夕）

作業員が立ち去る。

先輩教諭「ご苦労様でした」

と、頭を下げる。

それから窓を見て、満足げに微笑む。

機嫌よく歩いていく。

割れていた窓ガラスが修理され、綺麗になっている。

《終わり》